

先進国型GIAHSとして世界に貢献

発展途上国においても、工業・サービス業の発達により、
地域の特徴的農業が喪失しています。

阿蘇は、厳しい環境の中でも農業者が多様な農業を維持し、
地域住民と共に生物多様性や伝統文化を守るモデルとなり得ます。

阿蘇ならではの農業システムを「ASOモデル」として
世界に発信していきます。

<http://www.giahs-aso.jp>

継続はタカラ。

『阿蘇地域世界農業遺産推進協会』

〒869-2612 熊本県阿蘇市一の宮町宮地2402
熊本県県北広域本部阿蘇地域振興局農業普及・振興課内

TEL.0967-22-1115 FAX.0967-22-3563

世界農業遺産『阿蘇の草原の維持と持続的農業』

世界農業遺産に認定された 阿蘇の価値



阿蘇は温暖湿潤な気候のため、放っておくとすぐに、やぶ化してしまいます。草原の維持には野焼きなどの人の手入れが必要です。

阿蘇の農業システムでは、草資源の多様な活用がポイントです。世界的に見ても、草資源は放牧や家畜の飼料のみに使われることがほとんどですが、阿蘇ではそれ以外にも、田畑にすき込んだり、野草堆肥を作ったり、茅葺き屋根の材料や燃料として利用するなど、農業システムの中心となる存在として利用されてきました。

また、阿蘇の野焼きの炎は地面をサッと焼くため、温度が上がるのは地表のみで、土中の植物の種や昆虫には影響を与えません。さらに、人々の農業活動により草原環境が維持されたため、絶滅危惧種を含む数多くの草原性植物や、そこをすみかとする昆虫や小動物の宝庫となっています。

阿蘇の農業は草原を千年以上も守り続けてきました。その価値を、国連食糧農業機関が示す5つの認定基準に沿って紹介します。

多様な農林産物

《農業》

阿蘇は、高地の冷涼な気候である上に、火山性土壌のため生産性が低く、また、火山による降灰や降雨による浸水害を受けるなど、元来、農業生産に適した土地ではありませんでした。このため、カルデラの底に広がる平野では長年にわたり農地の改良などが行われてきた結果、今日では稲作のほか、夏季冷涼な気候を活かした野菜・花きなど多様な農産物の生産が盛んに行われています。

《畜産業》

野焼き、放牧、採草というサイクルが阿蘇の草原を維持してきたことを考えれば、畜産業の果たす役割は大きなものがあります。

阿蘇では褐毛和種(あか牛)をはじめとした繁殖経営が行われてきました。現在、県内の繁殖雌牛(母牛)の約1/4が阿蘇で飼われており、肉用子牛の供給地帯となっています。

《林業》

林業も、阿蘇における主要な産業です。阿蘇の森林のほとんどは、植林されたスギやヒノキからなる人工林であり、「小国杉」は全国的なブランドとして知られているほか、全国唯一のヒノキの挿し木品種である「南郷檜」もあります。



巡る農林業

続く草原



阿蘇の持続的な 草原管理システム

草原は、牛馬の放牧の場としてだけでなく、草が牛馬の飼料や厩舎の敷料となり、牛馬の糞で堆肥を生産して田畑へ投入してきたように、畜産のみならず、稲作や畑作と緊密に結びつき循環的に利用されてきました。特に1950年代までは、農業用牛馬の飼養、堆肥の確保、田畑の耕作と、それらを生業とする農家が牧野を集落ごとに入会地として管理することがセットで営まれてきました。

「野焼き」は、春を迎える2月後半から4月にかけて行われます。野焼きにより、低木を除去し、初夏にはススキなどを再び繁茂させる、省力的で効果的な草原の管理技術です。

放牧は、野焼きの後、野草が伸び始める4月から霜が降りる11月頃まで行われます。

また、初秋になると採草では冬場の貯蔵飼料を得るための干し草刈が行われます。50年ほど前までは北外輪ではススキで作った小屋に何日も泊り込んで草を刈る「草泊まり」が行われていました。刈った草は1〜2日天日干した後、その場で「草小積み」と呼ばれる形に積み上げて保存されていました。



生物多様性と 生態系機能

阿蘇の草原は、人々が野焼き・放牧・採草を繰り返すことで維持され続けている半自然草原です。

阿蘇には、ハナシノブ、ヒゴタイなど希少な植物が数多く見られます。これらの植物は、最終氷河期以降の気候変動で日本列島の大半の地域から消失したものです。九州がユーラシア大陸と陸続きであったことを示す植物も数多く見られます。阿蘇では、野焼き・放牧・採草という人為的な農業活動により草原が維持され、今日まで希少種が保存されてきました。このため、日本国内でも絶滅危惧種が集中している生物多様性ホットスポットの一つとなっています。

高冷地で多雨の気候に適合して、米や夏秋野菜など多様な農産物に加えて、在来野菜も豊富です。

「阿蘇高菜」は、火山性土壌の高冷地という阿蘇の厳しい気候風土が生み出した在来野菜です。そのほか、赤い葉柄が食用となる里芋の一種「あかどいも」、「鶴の子いも」、「黒菜」などがあります。

広がる命

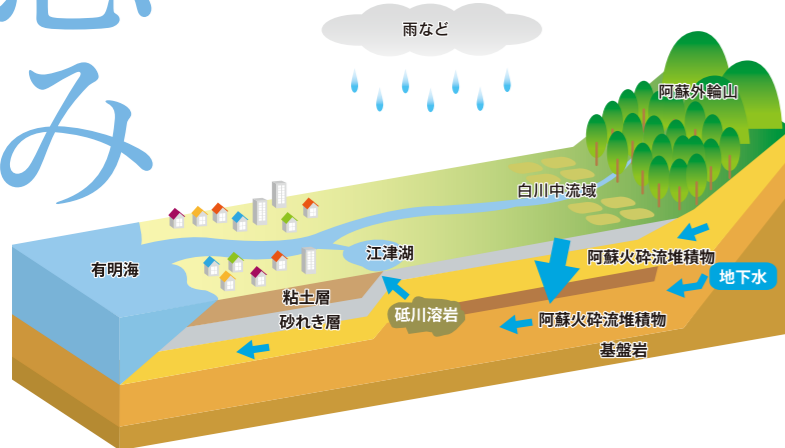
水の恵み

優れた景観と水の恵み

阿蘇は、火山活動によって人の営みの規模をはるかに超えた広大なカルデラが形成されています。またその中で、人々により、草原、森林、水田が維持保全されることで、スケールの大きな優れた景観が広がっています。

さらに、草原、森林、水田の水源涵養機能により、阿蘇は6本の一級河川の源流域となっており、北部九州の「水がめ」と呼ばれています。

阿蘇に源流を発する白川の水や湧水・伏流水は、中流域の水田で地下水として涵養され、熊本地域(人口約100万人)の生活を支えるミネラルウォーターとなります。



タカラを 未来へ。

阿蘇は、日本に存在する草原の約半分の面積を有しており、農業という人々の営みにより維持され、独特の生物多様性を有する希少な地域を築いてきました。

しかし、農業人口の減少や、少子・高齢化、過疎化により、これまで保たれてきた草原を持続的に維持することは年々困難になっています。

そこで私たちは、この阿蘇の農業文化を未来につないでいくために、様々な取り組みをはじめています。

「阿蘇の草原の維持と持続的農業」を保全し推進していくために行うアクションプラン。

農林業の生産振興と草原の利用拡大



- 伝統的な農法である野草堆肥の活用などにより、農産物の高付加価値化を目指します。
- 阿蘇のあか牛を提供する飲食店の認定制度により、あか牛の消費拡大を図ります。
- 公共建築物の木造化等により、県産木材のさらなる利活用を図ります。

牧野組合や都市住民による草原管理の維持・充実



- 今後の牧野の利用・管理の目標や改善策を取りまとめた「牧野カルテ(野草地環境保全計画)」を策定します。
- 市民ボランティアや企業のCSR活動による草原保全に向けた支援を充実します。

自然環境・生物多様性・文化の維持・保全



- 阿蘇の草原の生物多様性の評価や草原再生事業による効果の検証を行います。
- 利用しなくなった草原のうち、希少動植物が集中分布しているホットスポット「花野」を買い上げ、野焼きなどの管理を行い、希少動植物の保全を図ります。

草原の維持への市民参加の拡大



- 阿蘇の子どもたちの農林業体験、生き物調査、草原維持活動の体験や草原・森林環境の学習を充実します。
- 修学旅行での農林業体験の受け入れ等を通して、都市住民へ草原・自然の重要性を伝えます。

伝わる文化

農業と関わりの深い伝統文化

阿蘇火山の活動は、農作物に大きな被害を与えることから、人々は古来より火山を神として敬ってきました。今日、阿蘇神社の周辺では、農業に関わりの深い儀式・祭事を多く見ることができます。

阿蘇の農耕祭事は、阿蘇神社・国造神社を中心として、年間を通じ稲作儀礼が行われます。阿蘇山の噴火による火山灰の降灰などの農耕被害を鎮め豊作を願う、古くからの人々の営みの様子がよく表されており、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

阿蘇の草原は、多くが入会地として集落単位で共同管理されています。集落単位で草の利用規定の設定や入会権者間の競合・混雑が回避されたこと、集団作業は個人作業に比べて効率性が高いことがあいまって、地域資源である草原の持続的な利用に大きく貢献しています。

